06

推進機（スラスター）が流れ星のような尾を引いて、機体は加速して行く。

きっと普段の夕星（ゆうせい）ならば、沸き立つ歓喜を抑えきれなかったのだろう。なんたって、あの〈エクステンド〉に乗っているのだから。

憧れの存在に登場し、街を守る。そんな空想を脳内で思い浮かべては高揚感に浸っていた。

「いつも、こんなシチュエーションを望んでったけな」

だが、そんな脳内のフィクションは今、現実のノンフィクションへと成り果てた。

ゲームセンターの格ゲーで、〈エクステンド〉を動かすのとは訳が違う。

操作レバーとボタンの代わりに握り締めた一対の操縦桿は相応に重く、足を掛けた踏板（キックペダル）からはエンジンの微細な振動が伝わってくる。こんなリアルをとても楽しむことなんてできやしない。

「待っていやがれ、クソ怪獣」

眇められた夕星の双眸は、レーダに映る怪獣の反応だけをキツく睨んでいた。

「ヒバチには指一本触れさせねぇよッ！」

先走る苛立ちに応えるよう、翡翠に明滅するカメラアイの先が、黒く巨大な人型を捉える。

一度は〈エクステンド〉を破壊したあの怪獣へと追いついたのだ。

操縦桿を前に押し倒せば機体はさらに加速する。その反動に息が詰まるも、〈エクステンド〉は握り締めた鉄拳は前に突き出した。

「さぁ、リベンジマッチと行こうじゃねぇかッ！」

大振りで軌道も丸わかりの喧嘩パンチは、さぞ避けやすかったことであろう。

怪獣は半身を引いて、素人丸出しの拳を躱してみせる――――それが夕星のフェイントだとも気付かずに。

「悪いが、卑怯なんて言わせねぇぞ」

〈エクステンド〉が素早く、右腰へと懸架された突撃機銃を引き抜いた。

「ブチ抜いてやるッ！」

咄嗟に回避行動を取った怪獣の正面はガラ空だ。

夕星がトリガースイッチを引き絞れば、怪獣の首元へと突きつけられた銃口が無数の弾丸を吐きだした。

発火炎（マズルフラッシュ）が瞳を焼かれ、銃声に鼓膜の奥を噛み切られようとも、指先を緩めるつもりはない。

開いた口で今も尚、「フジモリヒマリ」と反芻し続けるコイツを黙らせるためならば――――

―

「ハァ……ハァ……！」

ヘッドセットには「警告」の文字と共に弾を撃ち尽くしたことが表示された。

少なくとも百発以上の砲火に晒してやったのだ。分厚い甲殻を持たない怪獣では耐え切ることも出来ないであろう。

だが、夕星は爆煙の向こうで奴が嗤っているような気配を感じた。それと同時に、こちらへ向けて「発勁」が突き出される。

「マジかよッ⁉」

確か、中学の頃。コンビニで格闘技を題材とした漫画を読みながらに十悟（じゅうご）が「中華武術における発勁は、ただの打撃や張り手とは訳が違う」と解説してくれたことを思い出す。

曰く、発勁の威力には、力の大きさと、それが作用した時間の積が深く関わるらしい。

プロボクサーの打撃の特徴が「鋭さ」と「速さ」にあるのなら、対して発勁は「重く」そして、力が加わる時間も「長い」。その力積が結果として、鋼の装甲をも打ち破る衝撃を生むのだ。

「このッ……！」

既に怪獣の掌底は寸前まで迫っている。この間合いに入られては回避することも不可能だ。

ならば、と夕星は敢えて機体の腰を抜き、〈エクステンド〉を跪つかせる。

「うぐっ……！」

噛みつくような打撃に右肩を抉られたが、地面への設置面が増えたおかげで作用する力を足元に逃がせた。

それでも、弾けて咲いた火花と共に肩部の装甲を引き千切られる。機体内部にもダメージが生じたようで、握りしめていた機関銃が掌からこぼれ落ちてしまった。

今ので電送系が完全にイカれたのだ。だらりと垂れ下がってしまった腕はそのまま動かなくなる。

「チッ……致命傷を避けたとはいえ、片腕一本ってのは割に合わねーよな……」

一方、突撃機銃の一斉照射に晒された怪獣はどうなったのであろうか？

恐る恐る視線を上げた先にあったのは無傷の怪獣の姿であった。その喉元には銃創どころか、傷の一つさえ付いていない。

「フジモリヒマリ」

彼女の名前を呼びながら、真っ白な歯を揃えて、ニッーと嗤ってみせる。

「コイツ……ッ！」

だが、さっきの不意打ちは夕星にとって最大のチャンスでもあった。コイツが一筋縄で行かないことはもう十分に理解している。

そんな相手に果たして、右腕が壊れた状態で勝機があるのか。

『――――そう、固くなるなよ。もっと非日常を楽しむんだ』

「なんだ……？」

不意に、そんな声がしたような気がした

『あっー、マイクテス、マイクテス』

いいや、気がしたのではない。

ヘッドセットにはテレフォンマークが表示され、「何処かの誰か」との通信が接続（リンク）される。

『聞こえているかな、〈エクステンド〉のエゴシエーターくん？』

声の主は女性と思われる。ただ電波が不安定なのか、音声にはノイズが混じり、彼女の声を聞き取るだけでも精一杯だった。

『君は彼なのかな？　それとも彼女なのかな？　まぁ、どっちでもいいな。それよりも、私の声が届いているのなら応えをくれたまえ』

どうやら、通信相手がどんな顔をしているのか分かっていないのも互い様らしい。

夕星は少し警戒しながらも、謎の声に応じることにした。

「誰だよ、アンタ？」

ヘッドセット内に仕込まれたピンマイクを出しながらに、こちらも彼女の正体を探る。

「俺は神室（かむろ）夕星……悪いが、こっちは取り込み中なんだ。得体の知れない声の相手なんてしてる暇はねぇぞ」

『カムロユウセイ……ほう。君は神室君というのかい？』

彼女の声はしばし、意味深に黙り込む。僅かに「ジジ……ジジ……」と音が漏れるのは、通信機の向こう側で彼女が笑いを堪えているからだ。

「そのリアクション……アンタ、俺のことを知ってるんじゃ」

『あー、いや。完全にこっち都合の話だから気にしないでくれたまえ。それに君の目の前には、もっと気にすべき相手がいるだろう』

〈エクステンド〉の目の前では、怪獣が腰を下ろしながらに、腕を後方へと引き絞っていた。

もう一度、その発勁で〈エクステンド〉を壊さなければ、気がすまないと言いたげである。

「クソ……どうやら俺には、アンタが誰かを考える余裕さえないんだな！」

『ははっ、どうやらそうみたいだな♪』

彼女は何処かからこちらを見ているのだろうか。その笑い声は心底、腹立たしいものであった。

怪獣は未だ無傷のまま。コックピットには得体の知れぬノイズまみれの声が響きわたる。

状況は好転するどころか、どんどん混沌へと落ちているような気がした。

『まぁ、そうイライラするなよ。神室くん』

「馴れ馴れしく呼ぶんじゃねぇ。つか、アンタのせいでイライラしてるんだからな！　この覗

き魔悪趣味女め！」

『覗き魔悪趣味女とは心外だな。せっかく、エゴシエーターとして覚醒したばかりの君に、あの怪獣を倒すまでのナビゲートをしてやろうと思ったのにな』

夕星は眉を顰める。

今のが聞き間違え出ないというのなら、彼女は怪獣の倒し方を知っているというのか。

『ふふっ。それとも君にはこう言った方が良かったかな？　〈エクステンド〉の真の力を――

――「スターレター・プロジェクト」から始まった小さな奇跡を解き放つ方法を、この私がレクチャーしてやろう』